

本来的自己の探求としての精神分析

西村 則昭
仁愛大学人間学部

Psychoanalysis as a Search for the Authentic Self

Noriaki NISHIMURA
Faculty of Human Studies, Jin-ai University

ラカンの考える精神分析は、本来的自己（「特定の一」としての自己）の探求として捉え直すことができる。本稿では、主にフィンク、B.を参照しつつ、自由な哲学精神をもってラカンの思索を思索し直す心理療法家の立場で、以下のように考えられた。1) 精神分析の主体（神経症の主体）とは、象徴界と現実界に分裂し、象徴界を「任意の一」（非本来的自己）として生きている主体である。2) そのような主体にとって、母の欲望は父の名によって名付けられ象徴化され（ S_1 とされ）、象徴界と現実界の境界へと原抑圧されており、耐え難い表象は、 S_1 と連合することによって無意識（抑圧されたもの）となっている。3) 精神分析の究極的目標は、無意識の主体が S_1 を用いて話し、現実界に接触し、無意識を統合する作業を重ねていくことを通して、 S_1 を我が物とし、 S_1 によって自己を、象徴界において「任意の一」として根拠付け、現実界において「特定の一」として根拠付けることであるが、これは理念的目標に留まる、と考えられた。

キーワード：ラカン精神分析、本来的自己、無意識（抑圧されたもの）

1. 序

フロイト没後14年経った1953年のセミナーの中で、ラカンは次のように述べている。「私たちが楽しい精神分析に近ければ近いほど、それは真の精神分析になります。やがてそれは軌道に乗って似て非なるものとなり、小手先でおこなわれることになるでしょう。われわれは自分のやっていることがまったくわからなくなるでしょう。（中略）だから、楽しみましょう。われわれはまだ精神分析をやっているのですから」（Lacan, 1975a, p.91 [上 p.125]）。

フロイトは、精神分析の技法（自由連想と解釈）の確立以前に、主にヒステリー患者と関わる臨床の中で、彼女たちの心の秘密、「無意識」（抑圧されたもの）の表出に驚嘆感激し、よりの確に患者が無意識に遭遇し、それを患者に意識化させる技法として、精神分析の技法を確立したといえる。ラカンは、彼自身の分析実践を通して、まさにフロイトを驚嘆感激させ、彼に強い探究心を掻き立てたのと同様のものに触れえたと確信したのではないと思われる。そしてラカンは、フロイト同様の実践をおこなうこと、すなわち、分析主体

（*objet*）——ラカン派では患者は、分析家の援助のもとで自己分析をおこなう者として、このように呼ばれる——が無意識に遭遇し、それを主体化（意識化）していく作業を援助することに、無上の「楽しさ」を見出したのであろう。フロイトの実践、「真の精神分析」に近づけば近づくほど、楽しさは増し、逆もまた真である。しかし、そのような実践が次第に忘却され、技法は「小手先」のものとなり、精神分析が形骸化していくという危機感が、ラカンにはあった。ラカンの念頭にあった批判のターゲットは、当時台頭していたハルトマンらの自我心理学である。彼らは現実に適応しうる強い「自我」の構築を精神分析の目標と考えた。ラカンの掲げるモットー「フロイトに還れ」とは、フロイトの技法や理論を教条的に受け継ぐことではなく、患者の無意識へと開かれたフロイトの経験と思索に立ち還れということに他ならない。

ラカンはこのような洞察に基づき、精神分析を形骸化から徹底して守ることを自らの使命とし、セミナーという形で教育活動をはじめたといえる。ラカンは、フロイトの著作をまさに眼光紙背に徹するとき熟読玩味することによって、フロイトの思索の根本にある

臨床経験を、フロイトがおこなったよりも高度の概念的厳密性をもって説明しようとした。そのためにラカンは、ソシュール等の言語学やレヴィ・ストロースの構造人類学を援用し、またプラトン、アウグスティヌス、デカルト、カント、ヘーゲル、ハイデッガーなどの大哲学者との不断の対話をおこなった。このようなラカンの思索は、哲学の側からも高く評価されている。ジュランヴィル (Juranville, 1984) によれば、最大の概念的厳密性を目指しつつ、現実味を欠いた空疎な言説になってしまった哲学にとって、ラカンの思索は貴重な問題提起をおこなってくれるものとなっているという。まさにラカンは二十世紀の知の巨人というに相応しい。

このようなラカンの思索には、特に主題化されて論じられてはいないが、「本来的自己」あるいは「真の自己」、すなわち、唯一無二、交換不可能な自己、「任意の一 (l'un)」ではなく「特定の一 (un un)」としての自己の問題 (Lacan, 1973, p. 129 [p. 185]) が、必然的に含まれているように思われる。本稿では、ラカンの思索を主体的に思索し直し、彼における自己の問題を浮き彫りにし、彼の考える精神分析を「本来的自己の探求」として捉え直すことが試みられる。

狭義の精神分析に限らず、心理療法師 (カウンセラー) に援助を求めるクライアントは、「特定の一」としての自己を漠然とではあれ感じ、それが尊重され理解されることを期待して来談するであろう。クライアントは、多かれ少なかれ、「どうして (他ならない) 私がこんな目に遭わないといけなの!」という思いを胸の奥に抱えているであろう。「話を聞いてほしい」という要求は、まさに「特定の一」としての自己の実感に由来するものであろう。ロジャース派の受容と共感を基本とする、わが国の心理療法師は、そんな人々に真摯に応えようとしてきたといえるし、まさにそのことに自らの専門性を見出してきたといえる。

たしかに多くの場合、クライアントの本来的自己への問いは、漠然としている。しかしクライアントが比較的自覚的に、本来的自己への問いを投げ掛けてくる場合がある。これは私がある若い女性から聞いた話である。彼女は心理療法を開始して一年半経った頃、セラピストに「私のことをどう思いますか?」と訊いた。

彼女は自分がどうして特定の症状をかかえてしまったのか知りたいと思って、このように訊いたという。このときセラピストは、「うーん、どうだろうね。あなたは どう思う?」と訊き返した。それに対して彼女は「カチン」ときて、「セラピストは『『そう!』』とか『本当!』』と言って、話を聞いているだけじゃないと思って、イライラしてきた。そして『話ばかりで何になるんですか!』と怒ってしまった」。

この「私のことをどう思いますか?」という問いは、表面的には心理学的な「見立て」を訊いていたようだが、その根底には彼女の本来的自己が何かという真剣な問いが横たわっていたに違いない。だからこそ、その問いが、軽い調子で訊き返されたとき——このような返し方は、わが国のセラピストが常套手段としておこなうものである——、彼女は立腹してしまったのであろう。たしかにそのような問いに対して、簡単に返答できるものではないし、何よりその答えはクライアント自身が見出すべきものである。しかし専門のセラピストであるならば、クライアントからそのような問いが投げ掛けられたとき、それを全身全霊で引き受けて、クライアントの真剣さに見合うだけの、何らかの返答、クライアント自身の探求を真に促すような返答を提示すべきではないだろうか (このように述べるとき、私は恩師の河合隼雄先生のことを思い浮かべている)。そのようなセラピストの有り方、すなわち、クライアントの本来的自己の探求を援助する有り方は、たしかに家元制のような仕組みの中で、師匠から弟子へと伝承されうるであろう。しかしながら、そのような有り方は正しく伝承されるだけではなく、充分な概念的厳密性をもって説明される必要があるように思われる。そのためにラカンの思索は貴重な示唆を与えてくれるように思われる。

精神分析の「反証可能性」のなさを指摘したポパー (Popper, 1963) をはじめ、精神分析の非科学性はこれまでも指摘されてきた。科学的実証性が殊更に重視される昨今、精神分析に対する風当たりは厳しい。ここで私は、西田幾多郎が宗教を論じたときの哲学の立場を想起する。「私は人に宗教を説く資格あるものでもない。しかし宗教は非科学的なるが故にとか、非論理的なるが故にとか云うならば、私はこれに従うこと

はできない」(西田,1946/1965,p.372). 西田は自らの哲学の立場において、宗教に見出されうる論理の普遍性を探求した。それは通常われわれが用いる論理とは異なるものであるが、たしかに論理であり、しかも根源的な論理である。ラカンもまた、精神分析においてそのような論理を見出そうとしているように思われる。もっとも西田が宗教の立場とは一線を画して、あくまで哲学の立場に留まったのに対し、ラカンは精神分析と哲学の交差する地点をその立場としているが、

本稿において精神分析を論じる私の立場は、宗教を論じる西田の立場と類似している。西田は、宗教を「心霊上の事実」と規定し、「真の体験は宗教家の事である。しかし芸術家ならざる人も、少なくとも芸術というものを理解しうるごとくに、人は宗教というものを理解しうるであろう」(西田,1946/1965,p.371)と述べ、ある程度「宗教心」というものを理解しているならば、哲学の立場で宗教を論じることが可能であるとした。私はラカン派精神分析の実践に関しては素人である。しかし、精神分析やユング派の考え方をういて心理療法を実践してきた私の臨床経験——たとえそれが乏しいものであれ——を照合させてラカンを読み、ラカンの精神分析に関してある程度理解を持つことは可能であり、そして自由な独立した哲学精神をもって、ラカンの精神分析を論じることが可能であると思われる。私が特に影響を受けた哲学者は、ハイデッガーと、西田幾多郎以来の京都学派の哲学者たち、西谷啓治、辻村公一、上田閑照らである。また、私のラカン理解はブルース・フィンクをはじめ、主に英語圏の著者たち(Barnard, et al. ed. 2002, Evans, 1996, Feldstein, et al. ed., 1995, 1996, Fink, 1995, 1997, 2004, 2007, Macey, 1988)に負っている。

ラカンの思索は絶えず深化し、倦むことなく人々を挑発し、知への欲望を掻き立てていった。「ラカンがわれわれにすべての商品、すべての答えを与える日は、彼がわれわれを眠りに就かせ、精神分析を終えたときであろう。そうする代わりに彼はいつも、何事かを欲望される状態に置いておく」(Fink,2004,p.128)。その思索は相当錯綜し、用語の使用にも一貫性を欠くところがある。50年代後半に提出され、以後ラカン理論の根本概念となる「ファルス」に関しては、メイシー

もいうように、「ファルスの定義は増殖し、定義に定義を重ねるようになり、遂にお互いを否定し合い、かくしてファルスからペニスへの概念的退行を許している」(Macey,1988,p.189)。以下の論述は、フィンクの論を基にし、私なりのラカン理解によってフィンクを敷衍した部分を加え、敢えて整理して一貫性のあるものとしたことを断っておきたい。

精神分析とは何かという問いは、次のように分節されうるだろう。すなわち、精神分析の主体とされる神経症の主体とはどのようなものか、精神分析が関心事とする無意識とはどのようなものか、その都度の精神分析のセッションで目指されるべきことは何か、そして精神分析は究極的に何を目標とするのか、と。本稿ではこのような分節に基づき論述をおこなっていく。

2. ラカンの主体とは

ラカンの思索は、三つの次元、「象徴界」(言語活動の次元)、「想像界」(イメージ活動の次元)、「現実界」(言語やイメージを用いておこなわれるわれわれの表象活動に先立つ、物それ自体の次元)を想定することによって展開される。ラカンは人間主体を、これら三つの次元から徹底的に捉えようとする。

ここで次のことに注意しなくてはならない。「ラカンが『主体』と言うとき、彼はもっとも本質的なものを意味している」(Fink,1997,p.208 [p.300])。「主体」とはラカンの思索の根本語といえるものである。「主体」というと、「実体」(それ自体で存在するもの)として受け取られるかもしれないが、ラカンの「主体」は、ハイデッガー(Heidegger,1979)の現有(Dasein)のように、むしろそこから主体の実体化を考えることのできる基本現象のことを言おうとしていると思われる。ラカンの思索において問題化される主体は、発達的には生後六ヶ月から十八ヶ月までの鏡像段階にまで遡る。しかし精神分析の主体、神経症的主体となるのは、主体的に言語を用いることができるようになった主体である。主体が有るためには、必ずしもその言動が意識的自覚的におこなわれる必要はない。むしろラカンは「無意識」(抑圧されたもの)を生きる主体、「無意識の主体」を重視する。この節では、ラカ

ンの考える神経症的主体、すなわち、「ラカンの主体」(Fink,1995)といわれるものがどのようなものであるか、その成立過程に即して見ていきたい。

この世(現実界)にあらわれた主体は、生後六ヶ月から十八ヶ月の時期、運動調節能力の未完成の段階で、鏡像との同一化によって身体の統一性を先取りの獲得する。これが鏡像段階である。鏡面は自己のイメージが見出される場であり、想像界に相当する。鏡像段階の過程を経て、鏡像との同一化を果たした主体は、鏡像を核として、さまざまな他者との想像的同一化を重ねていく。その同一化の総体が自我である(したがって、自我は想像的な産物である)。そして主体は他者の真似をして言語を用い、活動範囲を広げていく。そのような主体が、以下に見ていくように、父性機能による「疎外(alienation)」と「分離(separation)」(Fink, 1997)を経て、象徴界(言語)に統合され、単なる模倣ではなく、主体性をもって言語を扱うようになる。こうして精神分析の主体が成立する。象徴界に統合される以前、主体は母と密着した関係の中で「享楽(jouissance)」(現実界における欲動満足)を体験できる。しかし疎外と分離を経て、象徴界に統合されることによって、享楽は失われる。

父性機能による疎外の体験の前提として、幼い主体が抱く次のような信念(幻想)が挙げられる。それは、自己が母の「一番(愛する存在)」で有るという信念である。主体は自己を母の欲望の唯一無二の対象として捉えるのである。またこのとき主体にとって、世界の中に「欲望」は「母の欲望」以外には無い。このようなことが起こる次元は、想像界である。母の欲望の対象＝自己は、「想像的ファルス」と呼ばれる(ここで敢えて「ファルス」という語を持ち出してくることに、ラカンの抜き難い父権の特徴が認められるであろう)。

疎外する父性機能は、主体の外で機能し、母子の密着した関係を切断する。例えば、母に密着している子どもに対して、父が「ダメ!」といって、母から引き離すとき、この「ダメ!」が疎外する父性機能を果たす。もっとも疎外とは、子どもはいつも母と一緒にいられるわけではないという現実によって、必然的に起こる事態であるし、また母が子どもに対して細やかな愛情

表現を苦手としたり、それが乏しかったりする場合にも、起こりうる事態である。とにかく疎外を経るとは、疎外を万能感でもって否定することなく、体験することである。しかし、疎外を経ることではまだ、世界の内には母の欲望以外に欲望は無く、自己が母の欲望の唯一無二の対象で有るという信念(幻想)は否定されない。それが否定されるには、分離する父性機能を俟たねばならない。

疎外を経た主体は次に、母の欲望のベクトルが自己以外のところ——多くの場合、それは父である——に向いていることに気づきだす。それは母の言動や様子ののはばしに伺われることになる。例えば、母が「パパのビール買っておかなくっちゃ」と呟くのを聞くときである。また母が父のことを語るときの弾む声や輝く笑顔、父を出迎えるときの嬉々とした姿などに、それは伺えるであろう。このように母の欲望のベクトルが自己以外のところに向かっていることを指し示すさまざまな語句、物事が、「父の名」と呼ばれるものである(「父の名」といわれるのは、後に述べるように、それがシニフィアンであるからである)。

父の名は主体に、自己が母の欲望の唯一無二の対象(想像的ファルス)で有ることを否定し、諦めさせる。これが父の名による「去勢」である。父の名による去勢が、分離する父性機能である。父の名は、「原始的な離乳よりも本質的な離乳、それによって子どもが母の全能との無条件のカップリングから離脱する離乳に必要なものである」(Lacan,1994,p.364[下 pp.221 - 2])。分離を経るとは、父の名による去勢を体験し、父の名を体得し、主体の内ですべてが機能するようになることである。

ここで大事なことは、何かが否定されうるのは、それがあらかじめ象徴化(シニフィアン化)されている限りにおいてであるということである。つまり、父の名は、自己を唯一無二の対象とする母の欲望(以下「母の欲望」とは、このような欲望を指すことにしたい)を名付けた上で、それを否定している。こうして父の名は、母の欲望を表面から消去し、背後に隠し持ちつつ、それを表現するもの(父性隠喩)となる。父の名は、母の欲望を最初のシニフィアン S_1 となし、それを消去しつつその場に来て、二番目のシニフィアン S_2 とな

る (S_1 は S_2 に論理的に先行するが、出来事としては、両者は共時的に成立する)。隠喩とは、表に出ているシニフィアンと、背後に隠されたシニフィアンの相乗的な意味喚起作用によって、新たな意味を生み出す創造的なものである。人間の成育史の中で最初に出現する隠喩は、父の名である。以後作られるさまざまな隠喩が、人間の言語生活を豊かなものにしている。

父の名の登場以前は、自己が母の欲望の唯一無二の対象であることを信じて疑わなかったが、自己が母の欲望の対象で有ることが一つの可能性で有るにすぎないことが、ここに判明して、はじめて母の欲望の対象になりたいという主体の欲望が生成される。こうして「欲望」を名付けるシニフィアン、すなわち、象徴的ファルスが成立する（以下ただ「ファルス」という場合、象徴的ファルスを指す）。

シニフィアンとはいわばシニフィエ（意味）を入れる箱である。このシニフィアンにはこのシニフィエを入れ、あのシニフィアンにはあのシニフィエを入れるということには、何の必然性もない。それがいわば約束事として決まっていることによって、言葉（parole）が成立する。「言葉とは常に契約であり、同意であり、ひとが了解し、同意しているものです」（Lacan,1981,p.50 [上 p.63]）。父の名による去勢によって、主体は、母の欲望も主体自身の欲望も同様に入れることができると、契約によって取り決められた箱、すなわち、ファルスという欲望のシニフィアンを所有することになり、象徴界において欲望の主体となる（象徴界の主体になることと欲望の主体になることは同一の出来事である）。ファルスの所有によって、はじめて主体は、言葉という契約の下、シニフィアンを用い、シニフィアン連鎖を生きることができるようになる。ファルスとは諸々のシニフィアンを繋ぐもの（繫辞）であり（Lacan,1958/1966,p.692）、そうして意味作用（シニフィカシオン）を可能にするものである。つまり、ファルスとは「シニフィカシオンそれ自体のシニフィアン」（Fink,2004,p.139）である。

ラカンはファルスに「喚喩」の機能を見出している[喚喩とは、あるシニフィアンを隣接関係にある別のシニフィアンで置き換えて表現すること、例えば「先生」を彼が飼っている「猫」で表現することである。

しかしここでラカンが喚喩というとき、上の例でいえば、「先生」と「猫」を繋ぐ機能のことを意味している。ラカンは喚喩の例として、トルストイの『戦争と平和』の冒頭に何度も登場する女性のあらわな肩を挙げている（Lacan,1994,p.145 [上 p.85]）。これらの官能的な肩は、読者の欲望を喚起しつつ、読者を物語（シニフィアン連鎖）に飽きさせることなく、その中に留める役割を果たしている。ファルスとは、これらの肩のように、主体を欲望の主体として象徴界に留める機能を果たすのである。「……人間の欲望は言語のメカニズムの中に囚われているので、欲望のメカニズムそれ自体に結び付いた、決して充足することのない永遠の接近へと運命付けられているのです」（Lacan,1998,p.122 [上 pp.178-79]）。欲望するとは、ひたすらシニフィアンの連結を続けていくことである。象徴界（言語）は欠如の場であるから、欲望が言語のメカニズム（喚喩の構造）に囚われているかぎり、どれだけシニフィアンの連結を重ねていっても、欲望の充足はありえないことになる。

以上のように疎外と分離を経ることによって、主体は、はじめて言語を他者の単なる模倣としてではなく、主体性をもって扱えるようになる。神経症の主体＝ラカンの主体（ $\$$ ）はこうにして成立するのである（ S は sujet [主体] の頭文字であり、 S に施された斜線は去勢を意味する）。

なお、ここで立ち入って論じる余裕はないが、ラカンは以上のような神経症の主体＝ラカンの主体の他に、精神病的主体と倒錯的主体を考えている。精神病的主体とは、疎外と分離を共に経ることができず、父の名を「排除」した主体であり、倒錯的主体とは、疎外は経ているが分離を経ておらず、父の名による去勢を一方で「否認」し、他方で「承認」している主体である。

ここで注意すべきことは、ラカンの主体とは父の名との関連性において論理的に見出されたものである、ということである。ラカンの主体が見出される人間は、必ずしも常にラカンの主体を生きているとはかぎらない。つまり、分析家が援助する相手は、あくまでラカンの主体であり、人間全体ではない。ここで論じる余裕はないが、ラカンはその思索の深まりの中で、ラカ

ンの主体に制約されない主体、すなわち、象徴界に統合されながら、現実界に開かれた主体、「女性的主体」(Lacan,1975b)を考えるようになる。たしかに女性的主体は精神分析の論理によって把握されえたものであり、精神分析の作業によってもたらされうるものであろうが、それは精神分析の作業に従事する主体以上のものであると思われる。

3. ラカンの無意識とは

われわれが内に抱く表象は、シニフィアン連合によって構成されている。ここで次のことに注意なくてはならない。それは、連合し連鎖をなすそれぞれのシニフィアンの意味は、その連鎖の全体の中で、はじめて確定され、そうしてその連鎖全体の意味内容が生成されるということである。その意味内容が耐え難い場合、そのシニフィアン連鎖は「抑圧」され、「無意識」となる。これがラカンの考える無意識、ラカンの無意識(言語として構成された無意識)である。このような無意識は、神経症的主体＝ラカンの主体の成立に伴って、必然的に生み出されるようになると、ラカンは考える。この節では、ラカンの無意識がどのようにして生み出されるのかを見ていきたい。

父の名によって母の欲望が象徴化され、消去される過程は、フロイトが「原抑圧」と考えた過程に相当する。フロイトによれば、「原抑圧されたものは、みずから結びつきをもてるようなあらゆるものとへ、引力をおよぼし」(Freud,1915a/2010,p.198)、以後の耐え難い表象——それは、今朝母にいわれて「カチンときた」言葉から、「あの人のことを好きかもしれない」という思い、そして深刻なトラウマまで様々ある——の抑圧(二次的抑圧)を可能にする。フロイトは、「備給」というエネルギー概念を用いて、抑圧を説明している。すなわち、抑圧されたものは、前意識からの備給を受け、意識化されうる状態にあったものが、その備給を撤回され、抑圧されたと考える。原抑圧されたものは、「前意識からはまったく備給を受け取ったことがなく、だから当然その備給を撤回されたこともないような表象」(Freud,1915 / 2010,p.229)。つまり、それは一度も意識化されることのなかったものである。以上の

ような原抑圧と二次的抑圧の考え方をラカンの捉え直してみよう。

原抑圧されたものとは、 S_1 (象徴化された母の欲望)に相当すると考えられる。主体に体得された父の名(S_2)によって、 S_1 は象徴界と現実界の境界へと失われる(Fink,1995,p.114[pp.165-66])。これが原抑圧である。主体にとって耐え難い表象(シニフィアン連鎖)は、 S_1 と連合することによって、「日常的意識」の外に置かれることになる(「意識」が何かは次節で論じる)。これが二次的抑圧であり、 S_1 と連合したシニフィアン連鎖こそが、ラカンの考える無意識である。

なお、フロイトによれば、原抑圧されたものは一度も意識化されたことがないというが、それはラカンによってより精密な論理をもって見出された神経症的主体＝ラカンの主体にかぎって言うことであろう。先に少し触れた、神経症的主体＝ラカンの主体に制約されえない主体(女性的主体)を生きることのできる人間にとっては、 S_1 は漠然とであれ、意識化されているであろう。

4. 意識の水準と精神分析のその都度の目標

「主体の発するパロール(parole, 言葉)は、主体の知らない内に、語る(discourant)主体の限界の向こう側に達します——話す(parlant)主体の諸限界の内部に留まっていることは確かですが」(Lacan,1975a,p.293 [下p.172])。この引用は、ラカンの考えるパロールとディスカールの違いを明確に示している。「話す(parler)」は、「語る(dire)」よりも広い概念である。パロールによってディスカールの限界を超える瞬間があることを、上の引用は言っている。これは精神分析の実践の中でラカンが会得したことに他ならないように思われる。このことはどのように考えられるだろうか。

語るとは、日常象徴界を生きる主体によっておこなわれる行為である。それは S_1 を失った状態で話すことである。一方、話すとは、 S_1 と連合したシニフィアン連鎖(抑圧されたもの)を話す場合も含まれる、より広い概念であると考えられる。では、どのようにして主体は精神分析において、語る主体の限界を超え

て、抑圧されたものを話すことができるようになるのであろうか。

ここで意識が生成される場（水準）ということを考えなくてはならない（「意識の水準」という補助線を導入することで、ラカンの考える精神分析は理解しやすくなると思われる）。私は「意識」を次のように定義したい。すなわち、「意識」とは、言語活動にしる、現実界の物にしる、それを「今、ここ」において、主体のイメージ活動によって、あたかも鏡に映して見るように反省的に捉えたものであると、おそらく意識の起源は、鏡像に自己を見出す鏡像段階にあるのではないかと思われる。意識は想像界を生きることからはじまるが、やがて象徴界の主体として生きようになって、それはより緻密で鮮明なものとなるのではないかと考えられる。というのは、言語は物事を明確に区別するはたらきを持つからである。では、意識をこのように考えるならば、意識の水準とはどういうことであらうか。

ラカンの主体とは、象徴界と現実界に分裂した主体であり、父の名によって分離（去勢）され、象徴界の主体として生きようになった現実界の主体である。しかしながら、大抵の場合、分離は完全には果たされておらず、それは主体の根底では否定されている（後述）。したがって、意識が生成されるのは、象徴界と現実界の境界においてであると考えられる。このことは夢というある特殊な意識状態を考えてみれば、納得がいくだろう。夢もまた、主体が語る主体の限界を超えて話す事態である。その話がイメージ活動によって捉えられたものが、夢という意識である。ところで、夢には不安夢というものがある。不安夢とは、ラカン（Lacan, 1978, p.199 [上 p.277]）によれば、「最終的な現実界の接近が体験され、われわれが想像界の崩壊を見る」、そのような夢である。不安夢では、イメージ活動が、それが捉えようとするものに追い付かなくて破綻してしまう。このとき現実界が直接体験されるのではなく（現実界との接触体験については次節で論じる）、破綻したイメージを通して「現実界の露呈（révélation）」が体験される。破綻したイメージとは、例えば、「顔の裏側」とか「形のない肉、その形そのもので不安を惹起する肉」（Lacan, 1978, p.186

[上 p.258]）などと表現されうる無気味なものである。次の引用は、そのような体験から捉えられた現実界のことを述べたものであると考えられる、「もっとも把握しがたい様相の現実界、どんな媒介も不可能な現実界、究極の現実界、もはや対象ではないが、その前ではすべての言葉が止まり、すべてのカテゴリーが座礁する、そんな本質的な対象、最高の不安の対象」（Lacan, 1978, p.196 [上 p.273]）。もっとも、これは初期ラカンが捉えた現実界であり、それは日常象徴界を生きる主体の観点から見られていることに注意しなくてはいいけない。

とにかく、意識は、イメージ活動が破綻するに到るまで、現実界に向かって限りなく接近していくことが可能であり、イメージ活動を維持しつつ、そこへと接近する度合いに応じて意識の深さ（水準）——日常的な比較的「表層」の意識から、夢や空想などの比較的「深層」の意識まで——が決まると考えられる。

日常場面では、われわれは一定の自己像（さまざまな「私は～で有る」が、一つに総合されたもの）との同一性が保持されるように（「私らしくない」と他者に思われまいように）、自己をコントロールしながら話をしている。精神分析は、カウチの上で主体に自由に喋らせることによって、そのようなコントロールから主体を解放し、比較的深い意識へと導くことができる。しかし本格的な精神分析の設定でなくても、ある程度そうしたことは可能である。例えば、面接室でクライアントが喋っていて、ふと我に返ったようになり、「どうして私はこんな話をしてしまったんだろう」と疑問に思ったり、「あれっ、私は今、何を喋っていたんだろう」とちょっとした健忘が生じたりすることがある。これは喋っていていつの間にか意識の水準が深くなっていて、ふいに日常的意識を取り戻したときであると考えられる。

このように深い水準の意識状態で話す主体において、 S_1 が次第に意識化されてくる。そうして S_1 と連合したシニフィアン連鎖（抑圧されたもの）が、意識化されてくる。それが意識化されてきたとき、主体の反応は大別して4通りの場合あるだろう。一つは、クライアントが「今思い出したのですが」と、それを語る場合である。これは抑圧されたものに対して、日

常的意識の親和性が比較的ある場合である。二つは、偽装されてそれが話される場合である。例えば、あるクライアントは「スーパーで小さな子どもが泣いているとイライラする。その子の母親に何とかしなさいと怒りを覚える」と言った。おそらく彼女は、抑圧された自らの母子関係の問題を、そのような話へと無意識的に偽装して語ったと思われる。三つは、言葉が出てこなかったり、言い間違いをするなどの失錯行為が起こる場合である。四つは、胸が一杯になって涙が溢れたり、怒りが湧き起こるなど、情動的反応が起こる場合である（その具体例を次節で述べる）。これらの内一つ目以外は、抑圧されたもの（無意識）が意識化される直前で反応が起こっている。このような反応の主体が、「無意識の主体」である。ここで大切なことは、無意識の主体は、抑圧されたものが何かを知った上で、それに反応するのであるから、その反応は S_1 を用いた言語活動（話）である、ということである。つまり、無意識の主体は、語る主体（ S_1 を欠如した状態で話す主体）の限界を超えて話すと考えられる。

無意識の主体によって発話された内容（シニフィアン連鎖）は、更に日常象徴界の主体として生きる主体に統合されなければならない。こうして抑圧は解除され、抑圧されていた表象が自己の歴史に付け加わることになる。それは「歴史を想起するというよりも、それを書き換える（récrire）」（Lacan, 1975a, p.20 [上 p.21]）作業であり、自己の歴史の全体を再編成する作業である。

（臨床素材）

ここで臨床素材を提示し、精神分析のその都度の目標の達成について、具体的に考察したい。

Bさんは、身体化障害をかかえる二十代前半の女性である。幼少の頃から母親に拒否されているように感じることが多く、充分甘えることができなかった。面接初期「一緒にお風呂に入ったことがない」などと彼女は語り、よく涙を流した。面接の深まりの中で、Bさんは結婚に憧れるようになり、「親子3人で公園を散歩するのが、私の夢」と語った。また「子どもの頃、他の子のお母さんを見て、私のお母さんはお母さんらしくないと思った」と言った彼女の言葉が、私には印象的だった。面接開始3年後のセッションで、Bさん

が「母は父に言いたいことを言えない。私に言うてくる」といったので、私は「恋愛結婚（前に聞いていた）じゃなかったの。言いたいこと言えないのは昔から？」と訊いた。するとBさんは、吐き捨てるような強い調子で、「そんなこと私に訊かないで下さいよ！」といった。普段おっとりした感じの人なので、その言葉の強さは私には印象的だった。このとき私はBさんが以前、「ひとにきつい言い方をしてしまうことがある」ということを思い出し、それはこのような言い方なのかと納得した。その後、このセッションの中でBさんは、「話さないでおこうと思っていたけど・・・」と、高校生の頃、母にある悩みを訴えた際、母に言われた言葉「あんたは何考えているかわからない！」を述べた。「そのときは頭真っ白。後から怒りがきた。それ以来母とはあたりさわりのない話だけ」と、彼女は語り、涙を流した。

これまでもBさんはときおり面接中泣くことがあったが、それは溜まっていたものが溢れ出すように、どつと涙がでてくるといった泣き方だった。Bさんが泣くのは唐突に思えることもあり、私が「今、悲しい気持ちが起こったのかな」と訊くと、「自分でもなぜ泣くのかかわからない」と答えたこともあった。そんなBさんの涙の出し方の唐突さと、このときの彼女のきつい言葉の出し方の唐突さが、私の心の中で結びついた。その一ヶ月後のセッションでBさんは、「職場の上司に私のことクール、きついこという子だねといわれた」と、沈んだ口調でいった。私は一ヶ月前の彼女の言葉を思い出したので、「そういえば、前にここでも出たことあったね」といった。するとBさんはすぐ思い当たって、ぱっと顔を輝かせ、「ああ、先生にも出てしまった……」と、微笑んだ。私は「あの言い方はいつものやさしい雰囲気のみと、ぼくの中で結びつくよ」と、率直にいった。Bさんは自分が肯定され受容されたと感じている様子で、穏やかなあかるい表情だった――。

不自然な強度を帯びた言葉「そんなこと私に訊かない下さいよ！」を発した主体、それは無意識の主体であると考えられる。この言葉には「私には母の気持ちはわからない」という意味がこめられているが、その背後には、強い怒りを伴う、「母も私の気持ちがわからない」という思いがあるだろう。その思いがBさん

の強く突き放すような口調を作り出したと考えられる。幼少の頃から、Bさんは母親に拒否されているように感じる事が多く、特に高校生のときに母に言われた言葉は、トラウマに値するものであった。その言葉は抑圧されていたが、その抑圧は心理療法の中で徐々に解除されていった。そしてまだ抑圧の状態にあったそのトラウマが、私の何気ない言葉によって触発され、それに対する無意識の主体の怒りの反応が起こったと考えられる。

Bさんは面接の中で、「子どもの頃、他の子のお母さんを見て、私のお母さんはお母さんらしくないと思った」ことを想起したが、そう思うからには、彼女は「お母さんらしさ」とは何か、母親の欲望とは何であるかの知、 $S(A)$ を持っていたことになる[A は母= \langle 他者 $\rangle(A)$ の欲望(欠如)を示し、 $S(-A)$ とは A を名付け、 S_1 となし、 S_1 とは何かを言うシニフィアン(S)を示す]。その知が面接の深まりの中で意識化されたといえる。その知とは、母親ならば自分のことを「一番」に思ってくれて、何でも分かってくれるという知である。そのような知は、一般的に子どもにおいて、多かれ少なかれ、生きるために必要な信念として抱かれているものであろう(母親のいない子どもの場合、その信念は母親代理に対して抱かれるであろう)。その信念が裏切られたとき、激しい怒りが惹起される。Bさんが高校生の頃、母に言われた言葉で激しい怒りが惹起されたのは、彼女の信念としての $S(-A)$ が裏切られたからであると考えられる。Bさんにおいて抑圧されたトラウマの全体(S_1 と連合されたシニフィアン連鎖)は、次のようになるだろう。すなわち、「母親ならば私の気持ちをみんなわかってくれるはずなのに、母は私の気持ちがわからないと言った。どうして!」と。Bさんへの私の対応は、無意識の主体と日常的主体とを結びつけ——それは私の心の中で自然にできた——、そのことによって、抑圧されていた表象を日常象徴界に据えられた自己の歴史へと付け加え、自己の歴史の「書き直し」を援助することであったと考えられる。

5. 現実界との接触体験

抑圧されたものが生きられる瞬間、すなわち、無意識の主体が S_1 を用いて話し出す瞬間、現実界との接触が起こっている。しかし、前節で述べたBさんの場合もそうであったように、大抵の場合、その一瞬の現実界との接触体験は言語化されることはない。しかしその接触体験が的確に言語化された稀有な例を、フロイトが『夢解釈』で取り上げた彼自身の夢の一つに見ることができると思われる。次節で論じるように、精神分析とは何かを徹底的に考えようとするラカンの思索は、セミナーX I (Lacan,1973)において転換点に達するが、そのセミナーの中で、問題の夢の分析がフロイトの分析を超えて更に推し進められることによって、抑圧されたものが生きられる瞬間における、現実界との接触の様が捉えられている。以下にそのラカンの分析を検討していきたい。

「ある父親が、自分の子どもの病床で昼夜を分かたず看病をした。子どもが亡くなった後、彼は隣の部屋に行って休むが、扉を開けたままにして、自分の寝ている部屋から、子どもの亡骸が大きなろうそくに囲まれて安置されている部屋を、見ることができるようしておく。一人の老人が、見守りを任されて、亡骸の傍に座り、ぶつぶつとお祈りを唱える。眠りに入って何時間か経って、父親はこんな夢を見る。彼の寝床の傍に、子どもが立っている。子どもが彼の腕を掴む。そして彼を責めるように囁きかける。ねえお父さん、見えないの、僕が燃えているのが? 父親は目を醒ます。そして明るい光に気づく。光は亡骸の置かれた部屋から射して来ている。父親は急いで行ってみる。すると年老いた番人は居眠りをしていて、大切な亡骸の経帷子と片腕が燃えていた。火の付いたままのろうそくが亡骸の上に倒れ込んだのだった」(Freud,1900/2011,pp.290-91)

フロイトは『夢解釈』でこの夢を取り上げる際、それは、ある女性患者が夢に関するある講演で聞いて、そしてフロイトに語った他者の夢であり、本人との間で分析する機会を得なかったものとしている。このような中途半端な取り上げ方がなされているのは、フロイトがその思索を押し進める上での、この夢の重要性

を認識しつつも、その背後にある欲望の怖ろしさに気づいており、とてもそれを公表する気にはなれなかったからであろう。ラカン¹は、分析家の嗅覚でフロイトが隠そうとしているものを察知し、分析家らしく曖昧な仕方でそれに焦点付けをおこなっている。この父親は頼りない老人に番人を任せてしまったことを後悔していた（と講演者は述べたと女性患者は報告したとフロイトは述べている）。この後悔は実際にフロイト自身のものであっただろう。しかしこの後悔の背後には、フロイトの彼の息子に関する、もっと苦い後悔の念が「保存 (perpétuer)」されている (Lacan, 1973, p. 57 [p. 77])。フロイトは、この夢が、せめて夢の中でも生きた息子と出会いたいという欲望を成就していると解釈したが、それ以外にこの夢が成就している抑圧された欲望は——彼はそれを公表することを回避したが——、息子をもはや亡き者として見たいという怖ろしい欲望である。というのは、夢の息子は父親の腕を掴み、自分が棺の中でろうそくの火で燃えていることを訴えたが、これは夢が息子をすでに亡き者として表象しているということであるからである。「ここで欲望は、残酷なまでにイメージされた対象喪失を現在化しています」 (Lacan, 1973, p. 58 [p. 78])。

この夢でフロイトが聞いた息子の言葉は、このような彼の欲望と関連しており、おそらく実際に現実場面における文脈で息子に言われたものであろう。この夢の生成過程をラカンは次のように考える。「…すべてが完全にまどろんでいる世界の中で、その声だけが聞こえました、『お父さん、見えないの、ぼくが燃えているのが』と。この語句はそれ自体火の粉です。それだけでその語句はそれが落ちるところに火をつけます。燃えるものは見えません。なぜなら、炎によって、『下に横たわるもの (l'Unterlegt)』、『下で担うもの (l'Untertragen)』、現実界に火がついているという事実が見えなくなるからです」 (Lacan, 1973, p. 58 [p. 79])。

隣室の物音に刺激されて、フロイトの心の中で息子の言葉がありありと甦ったとき、その言葉に反応して、その言葉と関連する、抑圧された怖ろしい欲望にまさに火がつき、それが無意識の主体（夢の主体）によって生きられることになる。無意識の主体は、倒れたろうそくの火が棺の中の息子に引火したという幻想で

もって、その欲望を生きる。ここで次のことに注意しなくてはならない。フロイトの抑圧された欲望（表象）は、幻想によって代理され偽装されて夢（炎）となった。しかし息子の言葉（表象）の方は、その代理となるものが欠如しており (Lacan, 1973, p. 59 [p. 80])、したがって、それは厳密には夢の平面ではなく、「夢の中で聞こえる彼岸」 (Lacan, 1973, p. 58 [p. 78]) である。つまり、息子の言葉は現実界において甦り——「すべてが完全にまどろんでいる世界」とは、現実界のことを言っている——、現実界から夢の中に届いている。

夢の中のフロイト（無意識の主体）は息子の声に呼ばれて、目覚めようとした。どこへか。それは息子の言葉が甦った場所、現実界へである。しかし彼が実際に目覚めたのは、われわれが暮らすこの現実、言語活動とイメージ活動によって「構成され表象された現実」 (Lacan, 1973, p. 59 [p. 80]) であった。ラカンによれば、この夢は「出会い損なわれた現実 (la réalité manquée)」どこまでも辿りつけない目覚めの中で、どこまでも繰り返される他ありえない現実に対するオマージュ」 (Lacan, 1973, p. 57 [p. 78]) である。これはどういうことであろうか。

「出会い損なわれた現実」とは、覚醒によってそこに到達することが期待された夢の彼岸、現実界であると考えられる。ここで *réalité* という語が用いられているのは、それが神経症の主体＝ラカンの主体から見られている（表象されている）からに他ならない。夢の中のフロイトはまさにそのような主体であった。そのような主体を堅持するがぎり、現実界に到達するはずの覚醒は、われわれの暮らすこの現実への覚醒となり、現実界には出会い損なわれることになる。しかし、この夢における現実界との出会い損ないは、出会い損ないという仕方での現実界との接触でもある。というのは、この夢は、失敗に終わったとはいえ、現実界への覚醒に到る一瞬に見られたものであり、その一瞬間、主体は覚醒しつつ夢を見続けることによって、現実界を目指して無限の距離をどこまでも踏破し、そこへとかぎりなく接近したからである。この夢＝覚醒は、抑圧されたものを生きる無意識の主体が、出会い損ないという仕方での現実界との接触を体験している様を的確に表現しているといえる。

ここで「オマージュ」という語について考えてみよう。それはフランス語における元々の意味である「臣従礼」（臣従の誓い）を意味していると思われる。つまり、抑圧されたものを生きるとき、無意識の主体は、現実界との絶対的な隔たりの下で現実界との接触を体験し、現実界に従属することを、この夢は表明している。現実界に従属し、その臣下となるとは、現実界において自己を見出すということである。主体は通常、無意識の主体も含めて、言語活動とイメージ活動によって世界を構成し、その内に有るが、そのような構成のおこなわれる場は現実界であり、したがって、主体は根源的には現実界の内に有る。この夢の分析はそのことを実証するものであったといえる。ラカンは思索の深まりの中で、根源的主体、現実界の主体の立場から、精神分析の経験を捉え直そうとするようになったと考えられる。

6. 精神分析の最終目標

無意識の主体として S_1 を用いて話し、現実界と接触し、 S_1 と連合した抑圧されたものを統合していく作業の積み重ねによって、意識の底に刻まれる現実界の印象は強化され、 S_1 は次第に主体自身の物となっていくであろう。そうして主体の意識は現実界との親和性を増し、主体は母の欲望に関する知、 $S(-A)$ を持つようになるだろう。もちろん主体は心理療法に入る前から $S(-A)$ を所有していることはある（そのような主体は、ここで論じる余裕はないが、セミナーXXで論じられる「女性的主体」である）。しかし $S(-A)$ は大抵の場合、漠然とした仕方ですべて所有されているにすぎない。精神分析においてさまざまな無意識を生き、抑圧を解除する作業を積み重ねていくことを通して、 $S(-A)$ はより意識化され明確化され仕上げられていくだろう。 S_1 は父の名によって原抑圧され、象徴界と現実界の境界に失われている（Fink, 1995, p.114 [pp.165-66]）。 S_1 に関する知、 $S(-A)$ を獲得し、 S_1 を我が物とした主体は、自己を S_1 によって象徴界と現実界の両方において根拠付けられることができるようになる。前者において根拠付けられるとき、自己は「任意の一」（非本来的自己）として見

出され、後者において根拠付けられるとき、自己は「特定の一」（本来的自己）として見出される。精神分析とは、結局のところ、 S_1 を我が物とすることによって、本来的自己を探求し、それを実現することを目指すものであるといえないだろうか。ラカンは、1964年のセミナーXIにおいて精神分析の究極的目標を「根源的幻想の横断」として表明した（Lacan, 1973, p. 246 [p.368], Fink, 1997, p.205ff [p.295ff]）。以下、この根源的幻想の横断の検討をおこない、そのことと本来的自己の探求との関連性について論じてみたい。

（1）根源的幻想

既に述べたように、幼い主体は父の名によって＜他者＞＝母と分離されて、神経症の主体＝ラカンの主体として生きようになるが、大抵の場合、分離は完全に果たされているわけではない。そのような主体は、その根底において分離を否定する幻想によって支えられている。フィンク（Fink, 1997）はこのような幻想を「根源的幻想」と呼んでいる。根源的幻想の有り方によって神経症は二分される。すなわち、ヒステリーと強迫症である。なお、ここでヒステリーと強迫症とは、症状のことをいうのではなく、主体の構造（どのような根源的幻想によって支えられているか）をいう。

ヒステリーと強迫症の、それぞれの根源的幻想がどのようなものであるかを述べるにあたって、まず「対象a」という概念を説明しておかなければならない。それは、「欲望の原因」となる、現実界的な対象である。例えば、われわれが「今、ここ」に不在の愛する人の声や眼差しなどを想起し、会いたいと切なく思うとき、その声や眼差しなどが、対象aである。それが「欲望の原因」と呼ばれるのは、それによって主体が動かされる次元である象徴界とは別の次元、すなわち、現実界に定位されるからである。対象aはまた失われた享楽の「残余物（le plus-de-jouir）」（Lacan, 1991）として、失われた享楽を想起させるものとして捉えられる。このような対象aをフィンク（1995）は、「想起させる残余物（rem(a)inder）」と表現している。

強迫症の根源的幻想は、対象aを自己に属するものと捉える、自己完結的、自己閉鎖的、自己愛的なものであると考えられる。その幻想は $S \diamond a$ と表記される（ S は去勢されていない主体であり、誇大な自己愛を

もった主体である)。強迫症は男性に多く見られるが、彼らが愛する女性の声や眼差しや身体部位などを自らの所有物のように思ってしまうことに、その幻想は伺えるだろう。ヒステリーの根源的幻想は＜他者＞（A）に開かれ、＜他者＞にとっての対象aの位置に自己を据え、＜他者＞の全体性を実現しようとするものである。それは $a \diamond A$ と表記される（Aに引かれた斜線は、Aの欠如＝欲望を意味する）。そしてその幻想は、＜他者＞に失われた享樂を想起させ、＜他者＞において母の欲望を復興させ、自己が＜他者＞にとって「特定のー」となろうとするものであると考えられる。

転移とは、＜他者＞＝セラピストとの関係性の中で、ヒステリーの根源的幻想を再構成することである。面接室の中は、受容的（母性的）な雰囲気であるため、このような幻想が構成されやすいと考えられる。先に述べたBさんの場合、転移によって＜他者＞＝セラピストにおいてその復興が幻想された母の欲望（自己を「特定のー」として欲望する欲望）は、結婚への憧れという形で「昇華」されたと考えられる（当時彼女にとって結婚とは配偶者によって自己が「特定のー」として愛されることを意味していたであろう）。その一方で、Bさんは母の欲望（ S_1 ）に関する知、 $S(-A)$ を意識化し、抑圧されていた思いを表現することができた。精神分析の過程は、転移によって駆動されていく。したがって、精神分析において重視されるのは、ヒステリーの根源的幻想である。強迫症者は精神分析的過程に入るためには、「ヒステリー化」し、ヒステリーの根源的幻想によって自己が支えられなければならない。

セミナーX Iにおいて精神分析の最終目標は、「根源的幻想の横断」であると表明された。それは上に述べたヒステリーの根源的幻想（ $a \diamond A$ ）の横断のことであると考えられる。それはヒステリーの根源的幻想を言語化し自覚することに他ならない。その自覚化において A （[＜他者＞＝母]の[欠如＝欲望]）が言語化（象徴化）され、 S_1 となる。つまり、原抑圧され、象徴界と現実界の境界に失われていた S_1 が、我が物となる。既に述べたように、 S_1 が我が物となるならば、主体は象徴界と現実界の両方において自己を根拠付け

ることができ、前者において「任意のー」としての自己（非本来的自己）を見出すことができ、後者において「特定のー」としての自己（本来的自己）を見出すことができる。

しかしながら、精神分析で達成されうる根源的幻想の横断とは、その幻想が克服され、もはや跡形もなく消滅してしまうということではないのではないだろうか。その幻想は言語化自覚化されただけであり、依然として主体の根底において、主体を支えるべく機能し続けるように思われる。つまり、根源的幻想の横断とは、現実界に到達し、自己が現実界に有ることを見出すということではない[そのような到達は、まさに主体自身の既に立っている場、足下に到達するような到達であるが、それは禅仏教によって目指されたものであるように思われる。これは別稿で立ち入って論じてみたい興味深いテーマである]。そうであるならば、 S_1 が我が物となったとしても、自己を現実界において根拠付け、本来的自己を実現することはできない。しかし無意識の主体として S_1 を用いて話し、現実界に接触する経験を重ねることによって、現実界の感覚が意識の中に次第に醸成されていく。そうして主体は現実界において自己を根拠付け、本来的自己を実現することへと限りなく接近していくことになる。根源的幻想の横断とは、本来的自己を探求し、それを実現していく過程の中に入ることであると考えられる。

（臨床素材）

Cさんは、過食嘔吐をかかえる二十代半ばの女性である。面接を開始して三ヶ月ほど経った頃、「自分の核のところを知りたい」と述べた後、続けて話しをする中で、次のように言葉に詰ってしまう事態に陥った。「セラピーはよくなるため、明るく生きていくことができるために通っていて、やがて来なくてはいけな……」。彼女は言い直そうとするが、つかえ、なかなか言葉が出てこない様子。ようやく「いつか卒業することになる」と別の言い方にして、その場を収めた――。

Cさんは精神分析的な心理療法に関してある程度の知識を持っていたが、「自分の核のところ」への関心は、私の面接の仕方に触発されて生じた可能性があるだろう。Cさんは比較的現実志向の人であり、「自分の核」などという言葉が彼女の口から聞くのは、些か意外で

あった。私の聞き方、雰囲気がおそらくCさんに、私の求めている（欲望している）ものが、彼女の「核」であると感じさせ、そして彼女は私の欲望を自らの欲望とするようになったのではないかと考えられる。そのような欲望を述べた後、カウンセリング（心理療法）の目的を語る中で、言葉がつかえて出てこないという事態に陥った。これは日常的主体の意図に逆らって突如無意識の主体が語ろうとしたからであると考えられる。無意識の主体は「カウンセリングに来なければいけない」と言いたかったようである。では、何故、無意識の主体はそうように言おうとしたのだろうか。面接を開始して三ヶ月ほど経ち、Cさんの中で、私との関係性においてヒステリー根源的幻想が再構成され、転移が生じつつあったのではないかとと思われる。その幻想とは、＜他者＞＝セラピストの欠如（欲望）を満たすもの（対象a）は「自分の核のところ」であり、それこそが自己であり、そのような自己がセラピストに失われた享樂を想起させ、セラピストにおいて母の欲望（自己を「特定の一」として欲望する欲望）を復興させ、セラピストの全体性を実現させる、そのような幻想である。目的を果たし心理療法を終えることは、＜他者＞＝セラピストからの対象aの分離であり、それは＜他者＞を欠如の状態に置くことである。＜他者＞をそのような状態にすることはならないから、自己＝対象aは面接に「来なくてはならない」と、無意識の主体は言おうとしたと考えられる。

Cさんとの心理療法は、十年近く続いたが、終結近い時期、彼女は私のことを「お母さんみたい」と何度も述べ、「自分は先生にとって特別なクライアントとと思っていた」と語った。おそらくCさんはそれまでの面接の中で、無意識の主体として現実界に接触し、 S_1 を用いて話すさまざまな体験を通して、自己が＜他者＞＝セラピストにとって「特別なクライアント」、「特定の一」で有るという実感を育んでいたであろう。そしてこのように言語化自覚化するに到り、Cさんは一応、ヒステリーの根源的幻想の横断を果たし、転移を解消していったのではないだろうか。

（２）欲動の主体

「根源的幻想を横断した主体は、欲動をどのように生きることができるのでしょうか。これは分析の彼岸であり、これまでだれも取り組んだことがなかったことです」（Lacan,1973,p.246[p.368]）。根源的幻想の横断によって、欲動を生きる主体、欲動の主体が実現されると、ラカンという。では、欲動の主体の実現とはどのようなことだろうか。それは本来的自己の探求とどのように関連しているだろうか。

欲動は現実界に有り、欲望は象徴界に有る。セミナーX I以前の初期ラカンは、象徴界の主体（欲望の主体）の立場で精神分析を捉えようとしていた。したがって、その時期の分析の目標とは、「満足を求めて叫ぶ欲動を口ごもらせ、押さえつけ、沈黙させる防衛的スタンス、享樂の圧倒的な経験に対してとられるスタンス」（Fink,1997,p.208-09[p.301]）を獲得し、欲望のもろもろの固着、行き詰まりを解消し、欲望をより円滑に生きることのできるような主体を確立することであった。欲望は「防衛」として機能する、すなわち、「享樂へと到る限界を超えることに対する防衛」（Lacan,1960/1966,p.825[Ⅲ p.339]）として機能する。しかし、思索の深まりの中で、ラカンは現実界の主体の立場で精神分析を捉えようとするようになった。セミナーX Iで表明された精神分析の究極的目標は、欲望による防衛を解除し、欲動を十全に生きることのできる主体、欲動の主体を実現することであった。

「欲動が表象に付着するのでなければ、あるいは情動状態として前景に出るのでなければ、およそ欲動についてわれわれはなにも知るところがないだろう」（Freud,1915b/2010,p.224）。ここで「知る（wissen）」（無意識的に知ることも含めて）とは、ラカンの主体による象徴界における活動であると考えられる。欲動が知られるには、それが象徴化（言語化）されシニフィアンとなり、そのシニフィアンが何らかの表象と連合される——この連合をフロイトは「付着する（heften）」という語で表していると考えられる——必要がある。しかし欲動が生きられるためには、このように知られるだけでは不十分である。というのは、欲動はそれ自体現実界に有るから、現実界において自己が見出されないかぎり、それは十全に生きられることはできない

からである。

ここでフロイトが精神分析の目標を定式化した有名な言葉、「かつてエスがあったところに、自我（das Ich）を成らしめよ」（Freud,1933/2011,p.104）について考えてみよう。エスとは、フロイトによれば、身体に由来する欲動の貯蔵庫となる心的な審級である。ラカンによれば、それは、主体において言語化されておらず、いまだ「私」になっていない部分である（Lacan,1994,p.46[p.52]）。抑圧された表象にはシニフィアン化された欲動が連合しているが、そのような欲動を現実界において捉えたものが、エスであると考えられる。ラカンは、「かつてエスがあったところに、自我（das Ich）を成らしめよ」を次のように捉え直す。すなわち、エスは現実界に有り、das Ich は主体であり、その定式は「現実界において主体を生じさせること」（Lacan,1973,p.45[p.59]）ということであると。これは、抑圧の解除によって、抑圧されていた表象に関連する欲動それ自体を生き、満足させる主体が、現実界において実現されることを意味すると考えられる。ラカンが根源的幻想の横断によって得られると考えた、欲動を十全に生きることのできる主体、欲動の主体とは、このような主体であると考えられる。そのような主体が現実界において見出す主体は、 S_1 によって根拠付けられる、「特定の一」としての自己、本来的自己に他ならない。つまり、欲動の主体の実現とは、本来的自己の実現に他ならない。

ところで、欲動の主体は、享樂（欲動満足）を体験できるという点では、乳幼児と同様であり、欲動の主体の実現は、ある意味分離以前を取り戻すことであるが、次の点で乳幼児とは決定的に異なる。すなわち、欲動の主体は、我が物にした S_1 によって象徴界において自己を根拠付け、非本来的自己の立場で、日常を生きつつ、享樂を主体的（自覚的）に体験することができるのである（「欲動の主体」とは正確には「欲動の自覚的主体」である）。

初期ラカンにおいて、現実界の主体それ自体は、「言えない、茫然自失の存在（son ineffable et stupide existence）」（Lacan,1955-56/1966,p.549）という言い方で捉えられた。その時期、ラカンの関心は主に、言語活動の主体（象徴界の主体）＝欲望の主体の主体

性（Lacan,1978,p.56 [p.66]）にあったからである。しかし思索の深まりの中で見出された欲動の主体においては、現実界において自己を見出し、「特定の一」として欲動を十全に生きるという主体性が認められるのである。しかしながら、先に述べたように、根源的幻想の横断は決してその克服解消ではなく、根源的幻想を横断したとしても、主体は依然として根源的幻想によってその根底を支えられている。主体はその横断（言語化自覚化）によって、いわば足下に到達するような仕方で現実界に到達することはない。そうであるならば、 S_1 が我が物となっていたとしても、現実界において、自己を根拠付け、本来的自己を見出すことはできないし、欲動を十全に生きることもできない。本来的自己の実現＝欲動の主体の実現は、理念的目標に留まると考えられる。

7. 明恵の夢において表現された欲動の主体

ここで欲動の主体の卓越したイメージと思われるものを取り上げたい。それは鎌倉時代の名僧明恵（1173－1232）が49歳のときにみた夢（久保田他,1981,pp.85-86）である。その夢はこうである。

同日の夜、夢に云はく、清く澄める大きな池有り。予、大きな馬に乗りて此の中を遊戯す。馬は普通に能く飼へる馬也。又、將に熊野に詣でむとして行で立つと云々。

案じて云はく、此の前三二日間の夜、夢に、予戯れて云はく、「熊野に参らばや」と云ふ。真証有りて云はく、「不実に此の如くに云ふ」とて之を呵ふ。即ち、自らは「我、此の如くならず」と云ひて誓言を立つ。今此を翻するに、即ち、実に詣でむと欲するは即ち吉相也。又、大きな池は禅観にして、馬は意識也。之を思ふべし。

ユング派の河合（1987）がこの夢を取り上げ解釈しているので、その解釈を参照しつつ考察したい。この夢は「禅観」、すなわち、修行としての瞑想をおこなっているときの意識状態をイメージ表現するものであると考えられる。河合（1987,p.177以下）は「意

識の次元」ということを考えている。通常の人間の意識は自と他、物と心などがある程度区別しているが、西洋近代において登場した意識は、その区別を鮮明にし、合理性や論理的整合性を高めたものである。一方、東洋では禅定や瞑想などの修行によって、その区別をよりあいまいにした意識が探求された。このように「区別」を基準にして、前者の意識から後者の意識へと深度を増していくというふうに、意識をスペクトラムとして捉えたものが、「意識の次元」である。これは先ほど述べた「意識の水準」をその様相に関して捉えたものであるといえる。既に述べたように、意識は象徴界と現実界の境界において生成されと考えられるが、意識が深くなり、現実界に接近し、より現実界を映し出すものとなるにつれ、さまざまな区別——自と他、心と物、男と女、真と偽など——が、次第に消えていくことになる。というのは、象徴界が差異で構成されているのに対し、「現実界には裂け目がない」(Lacan,1978,p.122 [p.162]) からである。

明恵にとって禅観の体験とは、あたかも大きな清らかな池で大きな馬に乗って遊んでいるようなものである。このとき明恵のイメージ活動は、破綻を来たすことなく限りなく現実界に接近し、さまざまな区別——河合が重視するのは、特に自と他、物と心の区別である——が消失していると考えられる。そのような意識状態において、象徴界と現実界の境界へと失われた S_1 が見出される。 S_1 は自己を象徴界と現実界の両方において根拠付ける。この夢において「予」(明恵)は、前者において根拠付けられた自己であり、「馬」は後者において根拠付けられた自己であると考えられる。夢の馬は自由自在に池の中を駆け回っている様子であるが、これは欲動満足(享楽)を表しているだろう。そしてこの夢には、欲動満足を体験する主体として、馬に乗った明恵が登場していると考えられる。

この夢は二、三日前の夢の続きとして見られたものである。前の夢では明恵が「熊野に参りたい」と言ったのに対して、「真証房」という人物に「いい加減なことを言うな」と詰られたが、それに対して明恵は「私はいい加減ではない」と言って誓いを立てた。それが馬の夢で叶ったわけである。明恵はそこに「吉相」を見出している。では、これら二つの夢の関連

性はどのように考えられるだろうか。「真証房」は欲動満足に対する防衛としてはたらく欲望を生きる主体を表わしていると考えられる。真証房の言葉は主体を象徴界に留めるファルスの機能を果たしている。真か偽かの区別のおこなわれる次元は象徴界である(Lacan,1975a,p.254 [下 p.109])。そのような次元に留める機能を果たす人物の名が真証房であるのは、まさに至当である。一方、「私はいい加減ではない」という明恵はこれから禅観へと入り、イメージ活動によって欲動の主体となり、欲動満足を体験しようとしていると考えられる。

河合が指摘しているように、この夢は、フロイト(Freud,1923/2007,p.20)が「自我」を騎手に、「エス」を馬に喩えたことを想起させる。フロイトの喩えは、抑圧されたものを「自我」(日常象徴界を生きる主体)へと意識化し、「自我」の制御下に置くことを語っている。河合(1987,pp.181-182)は、「意識の次元がいろいろと異なることを考えると、馬で表現されるような意識もあってよいはずであり、明恵はまさにその上に乗っかっているのである。(中略)そうすると馬は自然に熊野に向って、うまくことが運ぶのである。このような意識の把握の仕方は、まったく東洋的な感じを与えるものである」と述べている。おそらく河合は、ユング派的分析の実践によって得た経験をこの夢に託して語っているのであろう。すなわち、日常とは異なる水準の意識状態となって、クライアントの話を聞いていると、クライアントもそのような意識状態となり、物と心とが融合し合って、共時的現象(意味のある偶然の一致)が起り、自然と事がうまく運び、クライアントがその窮状から抜け出せるようになるという経験である。このような見方は、いかにもユング派、というよりは河合のものである。このような見方は、クライアントと共に、本来的自己の実現=欲動の主体の実現への過程を確実に歩んでいるという手ごたえから来るものではないだろうか。

文 献

- Barnard,S.,Fink,B.ed. (2002): *Reading Seminar X X :Lacan's Major Work on Love,Knowledge,and Feminine Sexuality*.State University of New York Press.
Evans,D. (1996): *An Introductory Dictionary of Lacanian*

- Psychoanalysis*. London and New York: Routledge.
- Feldstein, R., Fink, B., Jaanus, M. ed. (1995): *Reading Seminar X I: Lacan's Four Fundamental Concepts of Psychoanalysis*. State University of New York Press.
- Feldstein, R., Fink, B., Jaanus, M. ed. (1996): *Reading Seminars I and II: Lacan's Return to Freud*. State University of New York Press.
- Fink, B. (1995): *The Lacanian Subject: Between Language and Jouissance*, Princeton University Press. 村上靖彦 (監訳) (2013): 『後期ラカン入門 ラカンの主体について』, 人文書院.
- Fink, B. (1997): *A Clinical Introduction to Lacanian Psychoanalysis: Theory and technique*, Harvard University Press. 中西之信・椿田貴史・舟木徹男・信友建志 (訳) (2008): 『ラカン派精神分析入門 理論と技法』, 誠信書房.
- Fink, B. (2004): *Lacan to the Letter: Reading Écrits Closely*, University of Minnesota Press.
- Fink, B. (2007): *Fundamentals of Psychoanalytic Technique: A Lacanian Approach for Practitioners*, Norton Professional Books. 椿田貴史・中西之信・信友建志・上尾真道 (訳) (2012): 『精神分析技法の基礎 ラカン派臨床の実際』, 誠信書房.
- Freud, S. 新宮一成 (訳) (1900/2011): 「夢解釈 II」『フロイト全集 5』, 岩波書店.
- Freud, S. 新宮一成 (訳) (1915a/2010): 「抑圧」『フロイト全集 14』, 岩波書店.
- Freud, S. 新宮一成 (訳) (1915b/2010): 「無意識」『フロイト全集 14』, 岩波書店.
- Freud, S. 道籟泰三 (訳) (1923/2007): 「自我とエス」『フロイト全集 18』, 岩波書店.
- Freud, S. 道籟泰三 (訳) (1933/2011): 「続・精神分析入門講義」『フロイト全集 21』, 岩波書店.
- Heidegger, M. (1979): *Sein und Zeit*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Juranville, A. (1984): *Lacan et la philosophie*. Paris: Presses Universitaires de France. 高橋哲哉・内海健・関直彦・三上真司 (訳) (1991): 『ラカンと哲学』, 産業図書.
- 河合隼雄 (1987): 『明恵 夢を生きる』, 京都松柏社.
- 久保田淳・山口明穂 (校注) (1981): 『明恵上人集』, 岩波文庫.
- Lacan, J. (1955-56/1966): D'une question préliminaire à tout traitement possible de la psychose. *Écrits*. Paris: Éditions du Seuil. 佐々木孝次・三好暁光・早水洋太郎 (訳) (1977): 「精神病のあらゆる可能な治療に対する前提的な問題について」『エクリ II』, 弘文堂.
- Lacan, J. (1958/1966): La signification du phallus. *Écrits*. Paris: Éditions du Seuil. 佐々木孝次・海老原英彦・芦原脊 (訳) (1981): 「無意識の位置」『エクリ III』, 弘文堂.
- Lacan, J. (1960/1966): Subversion du sujet et dialectique du désir dans l'inconscient freudien. *Écrits*. Paris: Éditions du Seuil. 佐々木孝次・海老原英彦・芦原脊 (訳) (1981): 「無意識の位置」『エクリ III』, 弘文堂.
- Lacan, J. (1973): *Le Séminaire Livre X I: Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*. Paris: Éditions du Seuil. 小出浩之・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭 (訳) (2000): 『精神分析の四基本概念』, 岩波書店.
- Lacan, J. (1975a): *Le Séminaire Livre I: Les écrits techniques de Freud*. Paris: Éditions du Seuil. 小出浩之・小川豊昭・小川周二・笠原嘉 (訳) (1991): 『フロイトの技法論 上・下』, 岩波書店.
- Lacan, J. (1975b): *Le Séminaire Livre X X: Encore*. Paris: Éditions du Seuil.
- Lacan, J. (1978): *Le Séminaire Livre II: Le moi dans la théorie de Freud et dans technique de la psychanalyse*. Paris: Éditions du Seuil. 小出浩之・鈴木國文・小川豊昭・南淳三 (訳) (1998): 『自我 上・下』, 岩波書店.
- Lacan, J. (1981): *Le Séminaire Livre III: Les Psychoses*. Paris: Éditions du Seuil. 小出浩之・鈴木國文・川津芳照・笠原嘉 (訳) (1987): 『精神病 上・下』, 岩波書店.
- Lacan, J. (1991): *Le Séminaire Livre X VIII L'envers de la psychanalyse*. Paris: Éditions du Seuil.
- Lacan, J. (1994): *Le Séminaire Livre I V: La relation d'objet*. Paris: Éditions du Seuil. 小出浩之・鈴木國文・菅原誠一 (訳) (2006): 『対象関係 上・下』, 岩波書店.
- Lacan, J. (1998): *Le Séminaire Livre V: Les formation de l'inconscient*. Paris: Éditions du Seuil. 佐々木孝次・原和之・川崎惣一郎 (訳) (2005-06): 『無意識の形成物 上・下』, 岩波書店.
- Macey, David (1988): *Lacan in Contexts*. London: Verso.
- 西田幾多郎 (1946/1965): 「場所的論理と宗教的世界観」『西田幾多郎全集 11』, 岩波書店.
- Popper, K. R. (1963): *Conjectures and Refutations. The Growth of Scientific Knowledge*. London: Routledge & Kegan Paul Ltd. 藤本隆志・石垣壽郎・森博 (訳) (1980): 『推測と反駁 科学的知識の発展』, 法政大学出版局.